



第 39 号

編集・発行

信州大学附属図書館

繊維学部分館

平成13年4月9日

---

CONTENTS

---

むかしむかしの信州のことばとひとびと	機能高分子学科 太田 和親	(2)
私の読書遍歴 (5)		
私の好きな詩人 その2	機能高分子学科 近藤 慶之	(6)
分館通信 告知板		(14)
分館日誌		(16)
編集後記		(16)

---

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。

URLは <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html> です。

☺ 図書館ホームページ URL が変わりました!

# むかしむかしの信州のことばとひとびと

機能高分子学科 太田 和親

皆さん、日本語で浅間と信濃という意味がわかるであろうか？ 地名であることは皆知っているがその意味が山田や川口のようにすぐさま地形が想像できるような意味として理解できないはずである。何か音に本来の意味があり漢字は単なる音を表すための当て字のようである。

## 浅間の意味

他府県の人が、浅間(あさま)温泉と聞いたら、それは浅間山の近くにあると思うであろう。また、浅間温泉の近くで浅間山荘事件が起きたと誤解していた人もいたくらいである。しかし浅間温泉は、不思議なことに浅間山荘事件が起きた浅間山麓にはなく、遠く離れて別系統の山塊にあり縁もゆかりもない。それは約 50 キロ南の松本市にあり、浅間山とは全然関係がないところにある。さらに浅間という地名で不思議なことは、富士山山頂とその裾野で山梨県と静岡県のある富士山の周囲を取り囲んでいくつも浅間(センゲン)神社と呼ばれる神社が点在していることである。浅間(センゲン)神社は正しくはアサマと呼ぶそうだが、江戸時代の終わり頃から通称センゲンと音読みになったそうだ。アサマはどうもアイヌ語であったようだ。山奥とか、家の土台とか言う意味らしい。従って、アサマは浅間山のみを表す固有名詞ではなく、もっと一般的な意味を表す普通名詞だったらしい。ところが、江戸時代にはもう元の意味が分からなくなってしまい、浅間(アサマ)神社は浅間山と混乱を避けるために浅間(センゲン)神社になったらしい。

## 信濃の民話

信濃のとて古い民話に非常におもしろいものがある。

浅間山は女の神様で富士山のお姉さんにあたり、富士山も女の神様で浅間山の妹にあたる。地理的にその間にある八ヶ岳は男の神様で、その山の形は今のようになつて頂が分かれているのではなく、富士山と同じような形の一つの頂になっていたそうだ。この男の神の八ヶ岳と女の神の富士山がある時、自分の方が高い、いや私の方が高いと争った。この争いをとても心配そうに姉の浅間山は見守っていたそうだ。決着がつかないので、天の神様は2人の頭の上に樋(とい)を掛けて水を流した。そしたら、八ヶ岳の方に流れて勝負がついた。負けた八ヶ岳は悔しくて爆発し、山頂が吹っ飛んで今のような八つの頂になってしまったという。私が聞いたのはこうだったが、逆に富士山の方が負けて怒り、八ヶ岳を蹴飛ばしたので、山頂が吹っ飛んだという説もある。いずれにしろ八ヶ岳はこの争いのあと爆発して八つの頂になったらしい。

八ヶ岳が有史以来噴火したなどと言うのは聞いたことがないので、この民話はおそらく何千年も昔の八ヶ岳の噴火のことを言っているのだらうと思われる。何千年も昔には、この信州の地域には、縄文人が住んでいたはずだから、その時の言葉がそのまま地名に残ったと考えてよい。従って、アサマ山も、富士山の古名のフチの山も間違いなく、縄文語であろう。カムイフチは火の神様というアイヌ語である。富士山が噴火していた様子を表した名前に違いないと思う。戦前、アイヌ語研究の大御所、金田一京助氏が、この巷間の説を強く否定してしまったため、省みられていないが、この民話および下に述べるおもしろい事実から、フチの山もアサマ山もアイヌ語系の地名だと強く示唆される。

## 信濃の意味

話は変わるが、信濃という意味も日本語で分かるであろうか。シナノの漢字表記は信濃のほか科野などがある。従って、いわゆる音を写した当て字である。高校の古典で更級(さらしな)日記というのを習ったことがある。信州に来ると他府県にはないシナのつく地名がやたらと多いのにびっくりさせられる。更科(さらしな)郡、埴科(はにしな)郡、豊科町、立科町、蓼科高原、明科、神科などなど沢山ある。シナはアイヌ語ではなく朝鮮語系の言葉である。シナというのは朝鮮語で旗を立てて許可なく入るべからずという土地を意味しているようだ。従って、蓼の多い土地に旗を立てて、ここは我々のものと宣言したところは、蓼科。豊かな土地で領有したところは豊科と命名する。また、野と原は意味が違う。富士の裾野というが裾原とは言わない。なぜか。それは、野は傾斜地の原っぱ、原は水平な地の原っぱをいうからである。従って、シナノというのは、旗を立て我々が領有宣言した傾斜地、つまり、早い話が植民地である。シナノは「植民地」という意味だというと、信州の人が怒り出すかも知れないが、次のような興味深い万葉歌が残っていることが、信州上田市にある信濃国分寺資料館内の掲示からわかる。

「信濃道(しなのじ)は今の壘道(はりみち)刈株(かりばね)に、足踏ましむな履(くつ)はけわが夫(せ)」

信州は新しく開拓したところで、道も険しく整っていないので、京から赴任する夫よ、刈り株を踏まないよう、靴を履いて無事に行ってください、という意味である。壘(はり)については愛媛県に今治(いまばり)、茨城県に新治(にいばり)郡というのがあるが、正に新たに開拓領有して治めたこほり(郡)である。上の万葉歌を見れば、信濃が新たに開拓領有された土地であることは疑う余地がない。

信濃と名付けられる以前に住んでいた人々は、アイヌ語系の縄文人でそこへ朝鮮語系などの弥生人がやってきたのが、他の西日本よりはかなり遅かったのだらう。山が険しくてなかなか入り込めなかったものと思われる。

## 秋山郷の方言

信州の地勢はヨーロッパにおけるスイスと同じである。スイスは山が険しくて、周辺の言語がはい上って

きて定着したので、今もドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4つが国語として憲法に定められている。ロマンシュ語は5万人にしか話してはいないらしく、古代ヨーロッパの言葉が化石のように残ったらしい。現在の信州の方言も実は周辺からはいよってきて定着したため大きく4つに分かれている。特に秋山郷の方言は、室町以前の母音が8つの時代の日本語で、日本のロマンシュ語である。今も母音の「お」に二つあり、これを区別して発音するという。万葉仮名の時代は8母音であったことを橋本博士が戦前発見されたというが、これが現在も残っているというから正に化石のような方言である。弥生人が入り込んできた後はこのように朝鮮語系らしい弥生語は4つの方言に分かれて残ったのだろう。それまでの縄文語はおもに地名にしか残らなかったようだ。しかし、不思議なのはアイヌ語は今の日本語と同じあいうえおの5母音である。8母音の弥生語や朝鮮語の16母音のような言語が入ってきても、大多数の人は縄文語の5母音しか発音できず、これがそのまま現在の日本語になったのではないかと思う。従って、現在の日本語は、朝鮮語系の弥生語とアイヌ語系の縄文語の混血語であると思われる。

## 善光寺と諏訪大社

ここにとてもおもしろい事実がある。善光寺は、日本の仏教の宗派が生まれるずっと以前に建てられたので、無宗派でいずれの宗派、あるいはいずれの宗教の人も皆ウエルカムだと言われている。善光寺大本願前の句碑に「月影や四門四宗も只一つ」(芭蕉)とあることから万人を受け入れることがよくわかる。だから私はよく外人を連れていく。この善光寺は百濟系の人々が建てたといわれており、百濟が滅亡するまでは、この人々は本国へ子弟を留学させていたと聞く。

しかし、これよりもずっと以前に出雲から、諏訪地方に移住してきた人々がいるのだという。大和朝廷に出雲の国は滅ぼされてしまった。出雲神話では大国主命(おおくにぬしのみこと)が国引きをして国を作ったという。そして、出雲大社は大国主命がまつられている。信州の諏訪大社は、大国主命の息子の建御名方命(たけみなかたのみこと)がまつられていて、出雲大社とは親子関係にあるのだそうだ。毎年10月には、出雲で開かれる寄合に神様全員出席されるので、全国的には10月は神無月だが、出雲だけは神有月といわれる。弥生人系の大和朝廷に追われて、縄文系の出雲人が諏訪地方まで逃げてきたというのが真相なのだろう。縄文系の人が、逃げてきて落ち着く先は未だ縄文系の人々が暮らしているところだっただろう。そうでないと落ち着けないはずだ。タケミナカタの時代には、西日本のほとんどは弥生人系に支配される状況だったのだろうが、ここ信州だけが浮島のように縄文系支配地として残っていたと想像される。これが、だいたい2200年から1800年くらい前のことであろう。しかし、その後ついには、シナがいっぱい作られ最終的には、シナノの国として大和朝廷に組み入れられたのだと思う。

なお、諏訪大社の神主の家系の守屋(もりや)家は、タケミナカタの時代よりもさらに以前から住んでいた原住民の家系らしく、縄文時代からのものすごく古い家系だと聞いた。守屋家の先祖はタケミナカタの祭事

を担当することでタケミナカタ勢力と融和していったのだろうと思われる。そして今も続く諏訪大社の、天下の奇祭、御柱(おんばしら)祭は縄文時代からの伝統を表しているのだろう。また、興味深いのは、最近、諏訪大社と親戚の出雲大社の境内の地下から巨大な御柱(みはしら)が発掘された。この大発見により、太古の昔、16丈(1丈=10尺=3m)もの高さの社(やしろ)を建築していたのが、本当だったことが判明したと報じられたのは記憶に新しい。縄文人は巨大な柱に大きな意味を見ていたに違いないと思う。

## 信州人の顔

私が信州大学に赴任して、はや20年近くなる。信州出身の同僚や職員、学生を見ていると顔に大変大きな共通した特徴があることに気づく。皆、顎が大きく、いわゆる、えらが張っている。京都を中心とする西日本の人たちは顔が細長く、信州人のようにはえらが張っていない。長い間どうしてだろうと思っていた。

ある時テレビを見ていたら、縄文人と弥生人の頭骨から生前の顔を復元して比較していた。その復元された縄文人の顔が、私の同僚の藤本哲也先生にそっくりなことに驚いてしまった。彼は生粋の信州人で、長野高校の出身である。同じ長野高校出身で現在東大教授をしている坂村健先生がいるが、日本独自のコンピュータOS「TRON」の提唱者として有名な人である。この坂村先生、同僚の藤本先生、復元縄文人の3人の顔がそっくりなのは驚く。信州人の顔は縄文人の顔である。

## 平尾農協の桃

私の女子大学院生の森泉(もりずみ)さんも、えらが張った典型的な信州人の顔である。森泉さんの祖先は、森泉境と呼ばれるところに住んでいたと聞いた。非常に古い家系であるらしい。森泉境は佐久地方、軽井沢の近くにあり、崖の大変多いところである。

「先生、このうちで採れた桃食べて下さい。」と森泉さんが、箱に20個ほどきれいに並べられた桃を研究室に持って来てくれた。その箱には、佐久・平尾農協と書かれてあった。

「森泉さん、君の家は平尾地区にあるのか？ひょっとして、崖が近くにあってその終わりの方じゃないのかい？」

「そのとおりですけど、先生どうしてそんなことがわかるんですか？」

「アイヌ語でピラは崖で、オはお尻という意味だからだよ。」

私は森泉さんが、研究室に持って来てくれた桃を、早速、賞味させてもらった。桃を食べながら、遙かな古代に信濃のこの土地に、えらの張った顔をしてアイヌ語に似た縄文語を話していた、森泉さんや藤本先生、坂村先生達の先祖が、蟠踞、活躍していた頃を想像していた。信州はアイヌ語系の縄文人が沢山いたところへ、朝鮮語系の弥生人がつぎつぎと入ってきて成立したのだと、信州人になりつつある私は思うのであった。

# 私の読書遍歴

## (5) 私の好きな詩人 その2

機能高分子学科 近藤 慶之

ミレニアム(2000年)の除夜の鐘は、なぜか風流な響きを醸し出させてくれたように思います。

21世紀の夜明けは、ちよっぴり希望に満ちた少し不安げな複雑な気持ちが漂っていました。

昨年12月9日の“天声人語”は「21世紀中に実現する、あるいは実現してほしい新技術と、生活や社会の変化」についての記述であった。大学や企業などの科学技術系の研究者1200人が回答を寄せた集計である。「翻訳技術が普及し、世界の8割の人々が母国語のままで会話できる」。「地雷を化学分解するバクテリアが開発される」。「再生医療が一般化し、人体は人工臓器で構成される」。「人類が小型化し、食料・人口問題が解決する」。そんな中で「科学技術の独走を抑え、人間とは、進歩とは何かを深く考える哲学的思想の時代になる」との回答に出会って、ひと息つくとこの記述があり、今世紀深く考えていかねばならない大きな課題であろう。

「2000年の10大ニュース」を朝日、読売、毎日新聞など各社で募った結果が昨年末に報じられました。国内の部では「雪印乳業の食中毒事件」、「三宅島噴火で全島民避難」、「17歳の凶悪犯罪」などの暗い事件が多かったなかで、せめてもの救いは「白川英樹氏のノーベル化学賞受賞」、「シドニー五輪で日本勢が活躍」がひとときわ明るいニュースでありました。

ノーベル化学賞を受賞した筑波大学名誉教授の白川英樹先生とシドニー五輪女子マラソンの金メダリスト高橋尚子さんは遠い親戚関係だったとは、何ともはや不思議な巡り合わせでしょう。白川博士は1944年に母の富有野(ふゆの)さんの故郷である岐阜県高山市に一家で移り住み、高校卒業まで過ごしたようです。ノーベル賞受賞者と金メダリストの両者を子供の頃から知っている白川光雄さん(英樹さんの叔父で高橋選手の遠縁)は「めでたいことが続いてうれしいですが、まだピンとこない感じだね」と話したそうです。“めでたしめでたし”と祝福したいものです。政府は、この立派な功績に対して高橋さんには国民栄誉賞、白川博士に文化勲章が与えられたわけですが、私はシドニー五輪、女子柔道48キロ級の“やわらちゃん”こと田村亮子選手の金メダルも立派なもので“ご立派で賞”をやりたいです。“おめでとう、よくやった。3度目の挑戦でようやく手にできた五輪うれし涙の金メダルでした。”

田村選手の印象に残る言葉の数々……。 “夢のよう…初恋の人にやっと会えた”。 “今の私は人

と同じことはしたくない。自分でレールを敷いて生きたい。敷かれたレールの上に乗っかると「その通り」になるけれど、あえて何も無い所にレールを敷く人生っていうのが、希望があると感じるんです。”

例年のように住友生命が募った「創作四字熟語」は、2000年の世相の一端を振り返らせてくれた。

- ◎ 開票速報 → 怪票速報 (米大統領選の混乱)
- ◎ 医療器具 → 医療危惧 (医療ミスが多い)
- ◎ 付和雷同 → 不和雷童 (簡単にキレル若者が多い)

そのうち微笑ましいのは

- ◎ 王朝復古 → 王長復古 (日本シリーズ戦)
- ◎ 一路邁進 → 一朗米進 (イチロー選手の大リーグ行き)

でしょうか……。

今年に入っても「外務省」は「善無省」にしていきたいものですね！！

本題に入りましょう。

去年の“天声人語”で竹内浩三(こうぞう)について書かれた記事を紹介します。ご存知ない人が大部分でしょうがつぎの詩を作った兵隊だときけば、あるいは思い出すかもしれない。

< 戦死やあわれ / 兵隊の死ぬるやあわれ / 遠い他国でひよんと死ぬるや / だまってだれもいないと  
ころで / ひよんと死ぬるや / ふるさとの風や / こいびとの服や / ひよんと消ゆるや… >

生まれ故郷の三重県伊勢地方で今年の夏に2つの催しがあったようです。催しの一つは小さなコンサート。浩三の詩「骨のうたう」に曲をつけた歌を、郷里の人びとに聴いてもらおうという趣旨で、70人を前に、作曲した横浜の団体職員、小園弥生さん(39)のピアノ伴奏で、友人の舞台俳優、五月女(さおとめ)ナオミさん(36)が歌った。

小園さんは16年前に詩と出あった。衝撃を受けた。背を押されるように曲が生まれ、2人で歌い始めた。浩三のお姉さんが健在なのを知り、大切にしてきた歌を聴いていただけませんか、と手紙を出した。それをきっかけにコンサートが実現する。「歌うたびに、この詩とどう向き合うか考えています」と五月女さんは語った。

もう一つは演劇。劇団「伊勢青年劇場」が「竹内浩三」を上演した。出征直前の、浩三と周囲との心のやりとりを中心に、フィリピンで戦死するまでをたどる筋書きだ。この劇団は、地元ゆかりの人物を主人公にした芝居を、年1回のペースで上演しているそうです。

「詩」は曲をよび、歌い、コンサートや演劇が生まれ、人びととの交流の輪が広がり、友から友へと

友情の大きな輪となるところが私の気に入っている<sup>ゆえん</sup>所以です。

川崎<sup>ひろし</sup>洋さんというやさしい心のうたを作る詩人がいます。いくつかの詩集があります。「川崎洋詩集」、「ビスケットの空カン」、「ほほえみにはほほえみ」、「すてきな詩をどうぞ」などです。とっておきの詩を一つ紹介します。

「なぜ」

なぜ 風は  
新しい割ばしのように かおるのだから  
なぜ 鳥は  
空を滑れるのだから  
なぜ 夏蜜柑<sup>なつみかん</sup>は酸っぱいのだから  
なぜ 海は  
色を変えるのだから  
なぜ たった一人の人を愛するようになるのだから  
なぜ 涙は嬉しいときにも出るのだから  
なぜ フリユートはあんなに遠くまでひびくのだから  
なぜ 人はけわしい顔をするのだから  
なぜ ギターの弦は5本でなく7本でなく6本なのだから  
なぜ  
そして 人は なぜ  
いつの頃からか  
なぜ  
を言わなくなるのだから

思潮社から発行されている「現代詩文庫」12、「吉野弘詩集」があります。第1刷は1968年で、1998年の25刷が今、出回っております。鮎川信夫さんの推薦のことばにはつぎのように記されている。まるで詩人の役割について語っているような詩句がある。「やさしい心の持主はいつでもどこでもわれにもあらず受難者となる。何故ってやさしい心の持主は他人のつらさを自分のつらさのように感じるから」というのである。現代における「受難」の意味を、心のやさしさに求めるところにこの詩人に特有の、人間性への愛と理解が感じられはすまいか。社会的現実と自我の矛盾に苦しんでいる人間によせる作者のあつい同情は、ともすれば索漠としたものになりがちな現代人の心にうるおいを与えるものとなるだろう。

すてきな詩があります。3月に研究室出身の卒業生(女性)の結婚式に出席し、スピーチで紹介しました。



二人が睦まじくいるためには  
愚かであるほうがいい  
立派すぎないほうがいい  
立派すぎることは  
長持ちしないことだと気付いているほうがいい  
完璧をめざさないほうがいい  
完璧なんて不自然なことだと  
うそふいているほうがいい  
二人のうちどちらかが  
ふざけているほうがいい  
ずつづつしているほうがいい  
互いに非難することがあっても  
非難できる資格が自分にあつたかどうか  
あとで  
疑わしくなるほうがいい  
正しいことを言うときには  
少しひかえめにするほうがいい

正しいことを言うときは  
相手を傷つけやすいものだと  
気付いているほうがいい  
立派でありたいとか  
正しくありたいとかいう  
無理な緊張には  
色目を使わず  
ゆつたり ゆたかに  
光を浴びているほうがいい  
健康で 風に吹かれながら  
生きていることのがたかしさに  
ふと 胸が熱くなる  
そんな日があつてもいい  
そして  
なぜ胸が熱くなるのか  
黙つていても  
二人にはわかるのであつてほしい

谷川俊太郎<sup>たにかわしんたろう</sup>といえば私が学生の頃(1960年代)、親友と現代詩のすばらしさを語り合った詩人の中心的人物であつたように思います。ところが、最近の学生達に、この詩人を知っていますか?とたずねても、おそらく100人に聞いても知っていると答える人は1人か2人位と思われます。それは、いったいなぜでしょうか?想像するに、詩や小説を読むより週刊誌やマンガ本の方が、読み易くて面白いからと答えが返ってきそうな気がします。

昨今の学生さんの持ち物は車、ケイタイ電話、パソコン、おまけに彼女(彼氏)? 昔の学生さんは安目の楽器(ハーモニカ、ギター)、ラジオ、ステレオぐらいでしょう。したがって休日の過ごし方と言えば、ハイキング、日帰りの旅行、テニス、映画、パチンコ、マージャン、読書などでしょう。今の学生はドライブ、レストランでの食事とデート、カラオケとかなり様変わりしています。“勉強”の方は大丈夫でしょうかね? …。

話を詩人の方にもどしますが、谷川さんはお父さんが著名な哲学者谷川徹三<sup>てつぞ</sup>(1895~1989)さん(京大名誉教授)であることは知らない方も多いでしょう。昨年秋に信州、戸隠高原での催しがあつて、知人に誘われたのですが参加できなくて、とても残念でした。

現代詩文庫 27「谷川俊太郎詩集」は 1969 年第 1 刷で 1997 年に第 25 刷が発行されています。

その中の旅 1~8 があります。

「旅」 1

美しい絵葉書に

書くことがない

私はいま ここにいる

冷いコーヒーがおいしい

苺のはいつた菓子がおいしい

町を流れる河の名は何だったろう

あんなにゆるやかに

ここにいま 私はいる

ほんとうにここにいますから

ここにいますような気がしないだけ

徒然なる旅の詩が 8 つ入ったものです。読んで素直に溶け込んでしまいそうところが谷川さんの持ち味を感じます。

1991 年第 1 刷で 1996 年第 3 刷の青土社発行の「よしなうた」があります。日本語版と英語版 (William I. Elliot, Kazuo Kwamura 訳) が一緒になっていて“おもしろいこわい”36 篇です。表紙の帯カバーに“意味がなくとも人は生きる。意味がないからこの世はおかしい”と記述されています。

「よしなうた (Songs of Nonsense)」のいくつかを紹介しましょう。

「たんぼぼのはなの さくたびに」

こどもは しろいとびらをあける

とても おそろしいことを

こころのなかで かんがえるが

そのことは だれにもいわない

こどもは おちていたまりをひろう

うでのうぶげに きりのしずくが

にぶく ひかっている

いちどだけ たったいちどだけ

それでいいんだと こどもはおもう

だが いちどだけですむものか

たんぼぼのはなの さくたびに

こどもは かわべりでゆめみる

ほんとうに そのことをしたあとの

とりかえしのつかぬ かなしみを

「かえる」

かえるには なにかいいふるさたを

ほんきになって いたいとおもった

で かえるは けけこといったのだが

だれも みみをかたむけなかった

おたまじやくしだったころは

なにもいわなくて よかった

だまって あしがはえてくるのをまっていた

たまごだったころは もつとらぐだった

なまぬるいみずのなかで おりんおりん

だがそのもつとまへは どうだったのか

それはついとおあいだのことだったけど

おおむかしのようでもある

もういちど けけことおぼつとして

かえるは びびの井れた

「あじき」

ぼくはふしぎが だいすきなんだ

と そいつはいった

ふんふんと ぼくはたえた

ぼくはふしぎが だいすきなんだ

と そいつはいった

へいへいと ぼくはたえた

むじゅんしているかなと そいつはいった

じんせいって そんなもんな

と ぼくはたえた

いまのこと みんなうそ

と そいつはいった

てしがかい？ と ぼくはたすねた

ほかにすんなよ あとがこわいぜ

と そいつはすこんだ

「うた」

もうこれいじょう こにいてはならない

こには おがわがながれている

おがわには こみもういている

とうすみとんぼだつて とんでいるではないか

こんなけしきは もうみあまきているはずだ

たとえむこうの おかのかげに

へいたいともが かくれているとしても

いちまいのえのようじ

こには ほんとうのよるがない

あおぞらの がくおさのなかで

らつまぶもれれつとらつてつむじもりか

そにばらつてつむじのほなのおへん

もぐりこみみてはどうか

みつばちを おしのけて

美しい日本の詩歌⑨「工藤直子詩集」「うたにあわせてあいうえお」は岩崎書店発行で、1996年第1刷、2000年3月に第8刷が発行されています。刊行の言葉として小西正保さんが述べています。

美しいことばは美しい世界をつくる。いま、人間の世界は美しくない。人は人と争い、国と国は、民族と民族は、たがいて血を流しあう。海も山も空も、文明の発展の名のもとに汚され、こわされ、地球は一

筋に破滅に向かって歩んでいる。

いま、人間の世界は美しい。

美しいことばが人間の世界から失われつつあるからだ。

いまこそ、美しいことばをとり戻そう。……と。

私も以前より工藤さんの名前は知っていたのですが、詩集を買って読むのは最近のことです。まさに、“詩”とはこういう分かり易いものだと心をうたれます。簡明で健康、機知に富み、教育的であり、言葉あそびであるところが、多くの読者をひきつけていますとは北川幸比古さん(編者)のいうとおりです。“心のひびき”をかもしだしている作品はどれをとっても素晴らしいものです。3篇を紹介します。

「うたにあわせてあいうえお」

あさだよ  
あつまれ  
あいうえお  
いーこと  
いろいろ  
あいうえお  
うたごえ  
うきうき  
あいうえお  
えがおで  
えんそく  
あいうえお  
おいしい  
おむすび  
あいうえお

「心」

たいくつか心  
たいくつなり  
まりになれ 心  
わたしの手まりになつて  
おどれ 心  
まるい まりをついて  
わたしは自由にでかけよう

「いのち」

きのう 雨のなか  
濡れたつばさの  
飛べないからすが一羽  
死んだ  
きょう 雨あがり  
あかるいはたけの白菜が  
葉をのばす  
日は昇り また昇り  
また昇り また昇り  
いのちは  
まわっているまわつに思われる

しめの意味で、好きな教訓の言葉を記します。

われわれ凡夫<sup>ぼんぷ</sup>には

まことの心は

ないのです

(We, ordinary people, have no true heart.)

(凡夫とは普通の人、凡人のこと。)

旧千曲会館のお座敷の間にかかげられている針塚長太郎先生(初代上田蚕糸専門学校校長)の  
揮毫<sup>まごう</sup>の書を紹介します。

し                      たく                      と                      たく  
師                      啄                      徒                      啄

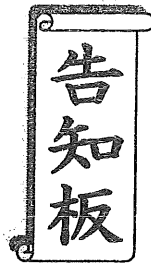
(右から左に読みます。たく と たく し)

徒は生徒  
師は先生  
啄はくちばしでつつく

先生は徒(生徒)をたびたびつつく(しげきする)ようにし、生徒はたまたま師(先生)をつついて(しげきして)やり、切磋琢磨<sup>せつたくま</sup>して学究の道を真<sup>ま</sup>つとうしなさいとでもいう意味になりましょうか。おそらく出典は中国の古文書と思われませんが詳細は不明です。

続く

次回(6)のテーマは教訓のことば特集、その1です。



ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。

次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ (<http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/>) でご案内していますので、そちらをご覧ください。

⇒ 図書館オリエンテーションについて

〇〇について書いた本を探しているのだけど図書館のどこにあるの？

××について調べたいのだけど何で調べたらいいの？

図書館にある端末やカードは何をするためのもの？

図書館を利用する際、図書館の利用方法や図書(文献)の探し方について疑問に思ったことはありませんか？目的の本が見つけれない、図書館にある設備の利用方法がわからず使えなかった、といった経験は誰にでもあるのではないのでしょうか。

図書館の有効な使い方を知ることは、学習・研究に多いに役立ちます！

そこで、図書館では特に新2年生の方を対象に、主に図書館内の設備の案内・図書館で行っているサービスの説明会を行います。松本の中央図書館とは多少異なる点もありますので、是非、参加してください。実施時間は以下の通りです。

\*\*\* 参加される方は、開始時刻までに 図書館2F会議室 にお集まり下さい \*\*\*

実施期間 4/10(火)~4/12(木) の3日間

① 13:10~ ② 14:45~ ③ 16:30~

\* 所要時間は40~50分ほどです。

🕒 期間中、1日3回行います。ご都合のよい時間に参加して下さい。

また、希望者(グループ)・講座を対象に、ご希望に沿った内容のオリエンテーションも行いますので、繊維学情報係(内線:5015、担当:武田)にご相談ください。

⇒ 無線LAN利用サービスを開始します

前号でお知らせしました無線LAN利用サービス開始の準備が整いました。図書館利用者で、ノートパソコンをお持ちの方ならどなたでもご利用いただけます。無線LANカードをカウンターで貸出しますので、利用を希望される方はカウンターへお申込ください。

なお、利用するためにはノートパソコンに利用のための設定が必要です。利用講習会を行いますので、利用を希望される方は是非ご参加ください。講習会の詳しい日程が決まりましたら、Library 号外として構内掲示板等でお知らせします。

⇒ 平成13年度係員の職務分担

平成13年度の係員の職務分担は下記の通りです。

担当者	内線	e-mail アドレス	職務分担
杉本係長	5313	jfc7102@giptc.shinshu-u.ac.jp	分館事務総括
濱光子	5015	Mitsuko_Hama@su-oasis.jm. shinshu-u.ac.jp	物品購入／備付機器等保守
渡辺彰宏	5016	jfc2101@giptc.shinshu-u.ac.jp	雑誌(購入／目録／製本) 別刷
武田佳代	5016	jfc5101@giptc.shinshu-u.ac.jp	図書(購入・目録)／閲覧 文献複写(受付)／情報システム管理
滝口智子	5015	jfc0200@giptc.shinshu-u.ac.jp	文献複写(依頼)／現物貸借 情報システム管理

\* 図書館の利用案内、各種検索端末の操作方法、資料の所蔵確認などは係員全員が担当しますので、お気軽にお尋ね下さい。

4月の人事異動により、繊維学部分館のために尽力いただきました大槻係員、鳴澤係員、宮下係員の三名が交代となりました。後を受けました三名も、一所懸命に務めますので、よろしく願います。

# 分館日誌 分館日誌

(1月～3月)

- |               |   |  |
|---------------|---|--|
| 1/22～<br>1/25 | 図書館新システム NALIS 操作説明会<br>(附属図書館会議室)  | 出席者—各担当係員  |
| 2/16          | 第5回 附属図書館運営委員会(SUNS)  | 出席者—平井分館長<br>松瀬運営委員                                |
| 2/28          | 第2回 信州大学附属図書館講演会(SUNS)<br>講師 佐藤 義則 氏<br>(山形県立米沢女子短期大学助教授)<br>『図書館と情報リテラシ』 | 出席者— 学内教職員<br>信州短期大学職員<br>上田女子短期大学教職員<br>上田市立図書館職員 |
| 3/9           | 図書館情報システム検討 WG 会議<br>(附属図書館会議室)   | 出席者—武田   |
| 3/28          | 第6回 図書委員会   |  |

## 編集後記

寒さと暖かさを繰り返しながら、すこしずつ春めいてきました。寒さが厳しかった分、春の訪れを例年以上に待ち望んだ方も多かったのではないのでしょうか。気が付けば、構内の木々もいっせいに芽吹き、花をほころばせています。

今号は、太田先生と近藤先生にご寄稿いただきました。読み物として楽しんでいただけたのではないのでしょうか。太田先生のお話は、県外出身者の私としましては耳新しいことで、興味深く読ませていただきました。不思議の国、信州(失礼!?)を改めて実感しましたが、皆さんはいかがでしたか。近藤先生の連載は早5年目を迎えました。今回もすてきな詩をたくさんご紹介いただきました。本文中で紹介された本は図書館にそろえましたので、是非こちらも読んでみて下さい。年度末のお忙しい中、快くご寄稿くださいましたお二方の先生に、この場を借りまして御礼申し上げます。ありがとうございました。

次号は7月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思っておりますので、ご意見・書評など何でもお寄せ下さい。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしています。

E-mail アドレスは、[jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp](mailto:jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp) です。